
『メタプティヒアカ』の創刊によせて

町田 健

名古屋大学大学院文学研究科長

名古屋大学大学院文学研究科が平成18年度より実施している「魅力ある大学院教育イニシアティブ」によるプログラムの一環としての「人文学フィールドワーカー養成プログラム」は、現在2年目を迎えその教育計画は順調に進行しつつある。

大学院教育の実質化を目標とするのが本プログラムであるが、「実質化」というこの用語は、一般的には漠然とした概念を表すに過ぎない。しかし、文部科学省が企図する大学院教育改革プログラムの枠組みの中でこの用語が意味するところは、独創的な教育プログラムを実施しつつ、標準年限内（博士前期課程では2年、後期課程では3年）での学位取得率を高めることだと理解することができる。修士・博士の学位を取得することを目的として教育と研究が実施される組織が大学院であり、教育と研究は、固より人類の知に新たな展開をもたらす独創的な事項を付加することをその第一義とするものであってみれば、実質化の内容が独創性と学位の効率的授与にあることは蓋し当然のことである。

この観点からして、本研究科が実施しているプログラムは、実質化が要求する事項を十分に満足させるものであると言うことができる。「フィールドワーク」の概念を拡張することにより、従来の人文学研究に新機軸をもたらす試み、そして学生が主体的に参加する実習プログラムを通じての教育体制には、疑いなく独創性がある。このプログラムに参加する学生に高い研究意欲が認められることは、現状から明確に看取される事実であり、学位取得を効果的に促進することが大いに期待される。

本プログラムの実施を支援・監督し、その円滑な実施を実現することを目的として設置された「教育研究推進室」もまた、プログラムの独創性と効率性を保証するものである。教育研究推進室は、イニシアティブ事業に限らず、研究科全体の教育研究に関わる重要な諸事項を処理する組織として現在機能しているが、イニシアティブ事業に関して特筆すべきは、大学院教育に関わる情報を収集し議論する場としてのワークショップを開催してきたことである。教育のスキルを向上させることは、すべての大学教員に求められるものであるが、この目的のためにワークショップが多なる貢献をなしたことは、本プログラムが達成した重要な成果の一つである。

今回、プログラムの責任者である周藤芳幸教授の尽力により、ワークショップで議論された諸テーマをもとにした報告を中心として構成されたプログラムの機関誌『メタプティヒアカ』が創刊されたことは、まことに慶賀すべきことである。本誌が、今後ともに、本プログラムの達成し得た成果を広く内外に伝える一助として継続されていくことを願ってやまない。